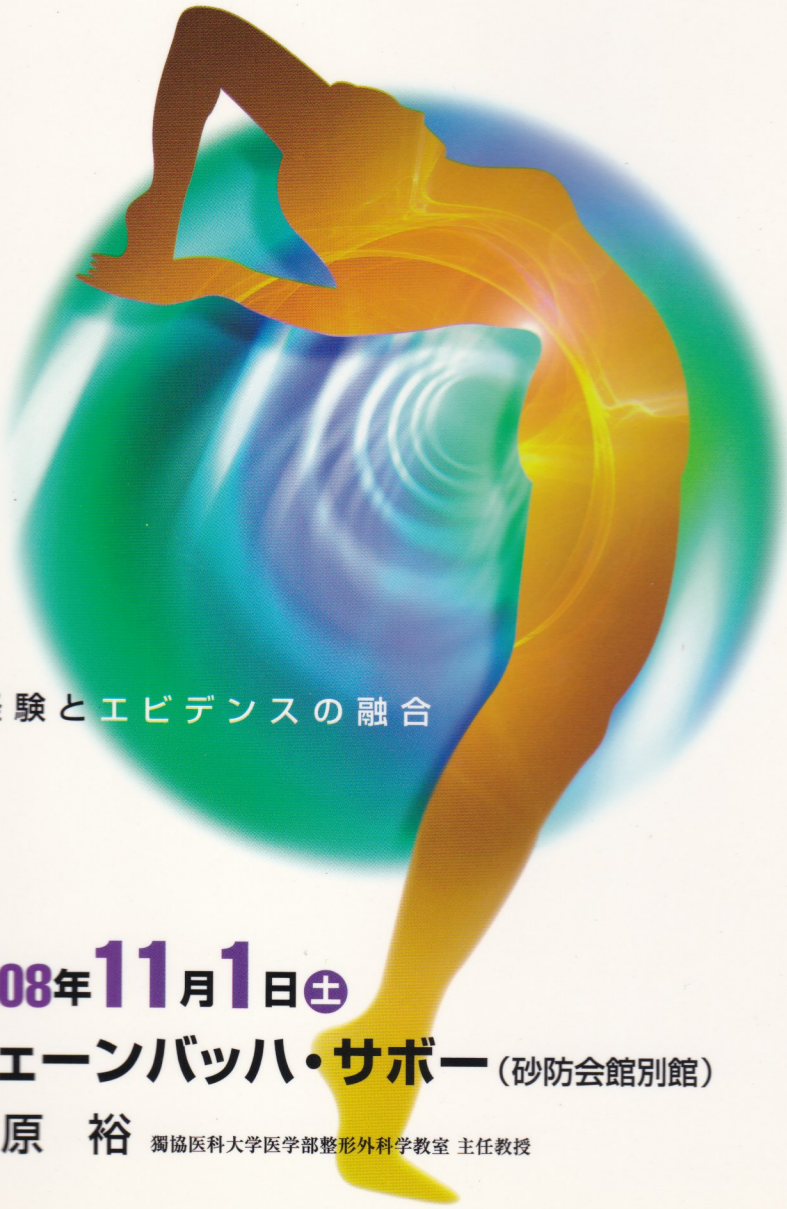
第16回
日本腰痛学会

The 16th Annual Meeting of the Japanese Society of Lumbar Spine Disorders

プログラム・抄録集



経験とエビデンスの融合

会期 2008年11月1日(土)

会場 シェーンバッハ・サボー（砂防会館別館）

会長 野原 裕 獨協医科大学医学部整形外科学教室 主任教授

ご挨拶

第16回日本腰痛学会学術集会の開催にあたって

会 長 野原 裕
（獨協医科大学医学部整形外科学教室）

この度、第16回日本腰痛学会を平成20年11月1日（土）に東京のシェーンバッハ・サボー（砂防会館別館）において開催いたします。

腰痛は二足歩行をする人類にとって宿命とも云うべき症状です。また、ご存じのように厚労省の国民生活基礎調査で、日本国民の有訴者率第一位は腰痛です。社会は確実に高齢化に向かい動いており今後腰痛患者がますます増加するだろうと考えているのは私だけではないと思います。その腰痛の原因は千差万別であり治療のやり方もまた十人十色です。その解決は我々医療に携わるものにとっても宿命と思われる難問題です。本学会はその解決を目指す数少ない学会の一つなのです。

近年、Evidence Based Medicine(EBM)が叫ばれ、科学的に実証された治療の重要性が強調されています。確かな根拠をベースにした考え方、治療方針の決定、その実施は、治療成績の向上には必須でありこれからの医療の中心になるものと思います。腰痛に悩む患者は古くから存在したはずで、その時代時代で様々な民間療法や物理療法がなされてきました。つまり経験に培われた治療法が数多くなされてきたのです。その中で得られた経験によって良いと思われたものは長年行われてきており、生き延びてきたわけです。しかし、良いと思われた方法にも問題の多いものがあるのも確かでEBMが叫ばれる所以ですが、優れたものが混在しているようにも思います。従って、エビデンスは重要でありますが捨てがたい経験があるのも事実です。今回は「経験とエビデンスの融合」をテーマに学会を企画しました。腰痛の研究や治療に関わっておられる大勢の方に集まっていただき、大いに討論していただきたいと思っております。

講演として、四宮謙一教授（東京医科歯科大学）には『腰痛疾患のガイドラインについて』、また持田譲治教授（東海大学）には『細胞移植による椎間板再生医療』についてお話し戴きます。パネルデスカッションは、『腰痛疾患―評価法』、『腰痛症に対する理学療法―Science, Evidence, and Experience―』、『腰痛疾患に対するinterventional therapy―現在から未来へ―』の3題を予定しました。いずれもup to dateな題目であり興味が引かれるものと思います。

本学術集会が明日の腰痛治療の参考になるならば大変意義深いと思っておりますので、大勢の皆様のご参加をお待ちしております。